指示表現と文体

―「この」のジャンル別コーパス分析を中心に

劉　　驫（京都大学大学院生）
ryuhyo1981@gmail.com

１．はじめに

本研究は「この」のジャンル別コーパス分析を中心に、いままでの指示詞の研究において、あまり問題視されていない文体・ジャンルの問題を取り上げる。指示表現は静的な表層語形によって決められるものではなく、話し手が聞き手とその知識状態を考慮するか否かという動的な捉え方によって選択されるものであると主張する。

２．先行研究

日本語の文脈指示のソ系とア系の対立に関する問題を解決するため、久野（1973)、黒田（1979)、金水・田窪（1990,1992)、田窪・金水（1996)、東郷（1999,2000）などが挙げられるが、コ系とソ系の問題は未だに解明されているとは言えない。

金水・田窪（1990）は文脈指示の「コ」が談話における新規情報を指し示すが、基本的に文脈指示には「ソ」が用いられると述べている。東郷（2000）は発話時点を境界とする話線の時間軸による分割と、話し手が情報提示の方略として行なう分割において「コ」と「ソ」が対立すると説明している。

庵（2007）は「この・その」の対立をテキストレベルで分析し、「この」の選択原理はテキスト送信者の「言い換え」、「ラベル貼り」、「長距離照応」と「トピックとの関連性」に決められると主張している。以下、庵による「この」と「その」の選択原理の全体像を提示する：

言い換えあり（言い換え、ラベル貼り）				― この
言い換えなし	―	遠距離照応		― この
		近距離照応	― 先行詞が	
			固有名詞 ― 逆接/対比	― その
			それ以外	― この／その
			普通名詞 ― 新聞・雑誌	― この
			小説	― （この／）その

表.1「この」と「その」の選択原理の全体像（庵2008）

劉（2010）は「言い換え」があるかどうか、または「遠距離」であるかどうかにもかかわらず、「その」が全く問題なく用いられる例文を挙げ、庵（2007,2008）の問題点を指摘している。本研究は、主に指示表現と文体との関わりを中心に、ジャンル別コーパス分析を行い、指定指示の「この・その」の分布状況を明らかにし、その理由を説明する。

３．ジャンル別コーパス調査

庵（2008）は新聞において「この」が「その」を上回り、小説では「その」が「この」を上回ることについて、「このことの解釈は今後の課題」と問題を残しているが、解決策には触れていない。

Petch-Tyson,S（2000）はジャンルの重要性について、「What may be “unsuccessful” in one genre may be just right in another(この「What」は指示表現を指す)」と主張している。Swales（1990）は、ESP（English for Specific Purpose）の観点からジャンルを分析し、本研究はその説をもとに、ジャンルを以下のように定義する：

話し手はある特定の目的を持って、聞き手と談話を展開する。異なった目的は談話の様々な異なった「かたち」をつくる。この「かたち」はジャンルであり、さらに内容・文体の選択を制限する。

このため、新聞のみ、または小説のみをコーパスにして考察すると、「この」の選択原理の全体像を把握することができない。本研究は経験的なアプローチから、語りと対話に分けて、６種類のジャンルにおいて、指定指示の「この」と「その」の分布状況を観察した[i]。その結果：

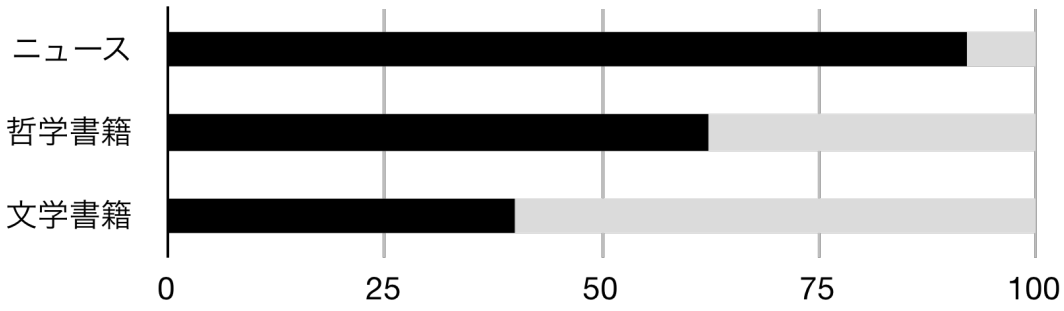


図. 1　語りにおける「この（黒)」と「その（白)」の割合

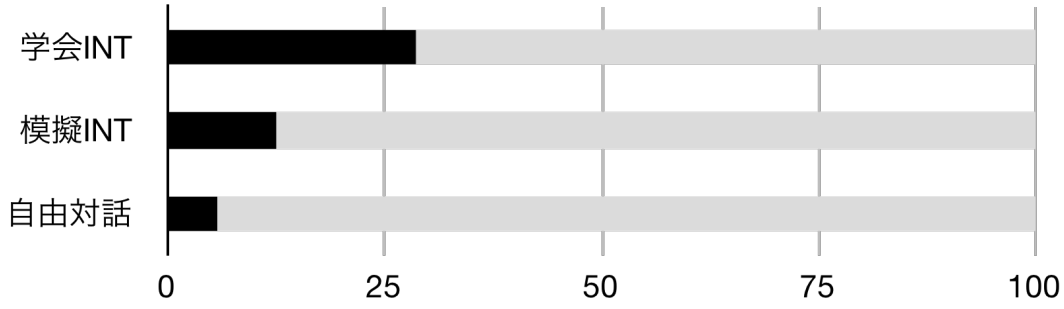


図. 2　対話における「この（黒)」と「その（白)」の割合

	ニュース	哲学書籍	文学書籍
この（全体）	**116例（92.1%）**	**139例（62.3%）**	**264例（40%）**
この＋NP＋は	99例	95例	180例
この＋NP＋が	17例	44例	84例
その（全体）	10例（7.9%）	84例（37.7%）	396例（60%）
その＋NP＋は	6例	55例	235例
その＋NP＋が	4例	29例	161例

表. ２　語りにおける「この＋NP＋は／が」と「その＋NP＋は／が」との比較

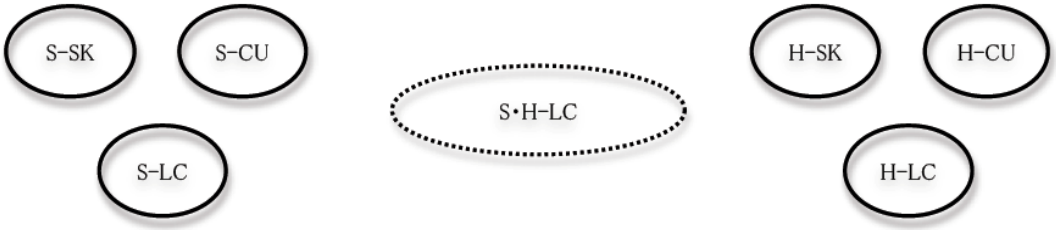
	学会INT	模擬INT	自由対話
この（全体）	**12例（28.6%）**	**3例（12.5%）**	**3例（5.7%）**
この＋NP＋は	7例	3例	3例
この＋NP＋が	5例	0例	0例
その（全体）	30例（71.4%）	21例（87.5%）	50例（94.3%）
その＋NP＋は	12例	4例	31例
その＋NP＋が	18例	17例	19例

表．３　対話における「この＋NP＋は／が」と「その＋NP＋は／が」との比較

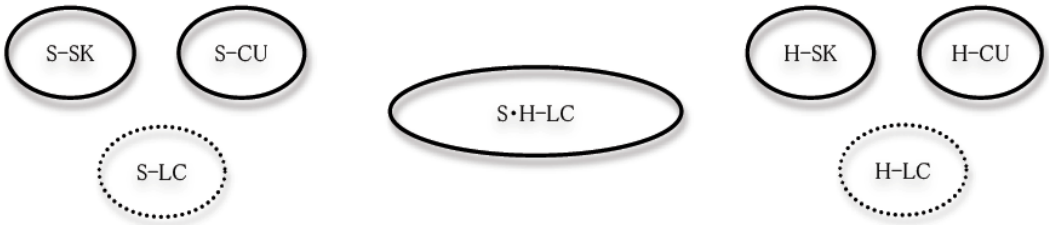
４．理論背景

「この・その」の分布状況とその理由を分かりやすく説明するため、本研究は東郷（1999,2000）の談話モデル理論（Discourse Model、以下DM）を理論的枠組とする。DMはメンタル・スペース理論（Fauconnier, G.1985）を発展させた認知的・談話的な理論であり、SとH双方が保持し、談話の構築にあたって発動される心的領域である。その下位領域には：共有知識領域（Shared Knowledge, 以下SK)、発話状況領域（Context of Use, 以下CU)、言語文脈領域（Linguistic Context, 以下LC）がある。

本研究はDM理論をもとに、現場指示の人称原理をもとに文脈対立型（図.1）を立て、距離原理をもとに文脈融合型（図.2）を立てる：



図．３　文脈対立型



図．４　文脈融合型

文脈対立型は、現場指示の対立型における人称原理の性格が最も現れるタイプである。この場合、S-LCは一人称領域（コ)、H-LCは二人称領域（ソ）という現場指示での人称原理と、文脈指示的用法を統一的に説明できるようになる。

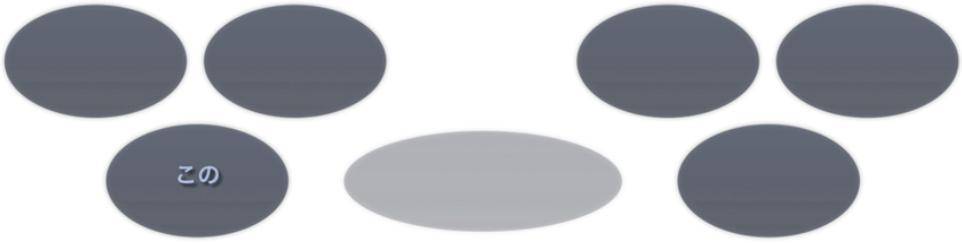
一方、文脈融合型においては、SとHはそれぞれの言語文脈領域（S-LCとH-LC）を一体化し、「いま・ここ」の発話時点の世界と並行する談話の世界（S・H-LC）を展開する。現場指示の融合型と違って、文脈指示の場合は空間のみならず、時間、空間、または時空両方を考慮しなければならない。

５．分析

5.1 ニュース報道文（語り）

ニュース報道文では、S（アナウンサー）は基本的にはH（聴衆/観衆）と対立的に談話を展開し、一方的に情報を伝達する（one-way communicating)。この場合、Sは情報の全面的な保有者であり、情報をS-LCからH-LCに順序よく登録して行く。一方、Hの知識状態を査定する必要がなく、それに依存する言語表現を用いにくいため、基本的には「この」を用いてS-LCに存在する指示対象を同定する。例えば、

① おでこに白いハート模様のある子牛が話題となっている。実は、この子牛が生まれた牧場のマークもハート型。(FNN2010.1.14)



図．５　文脈対立型では、SはS-LCに属する指示対象を同定する場合「この」を用いる

さらに、庵（2007:93）の例文もニュース報道文であるため、「この女性」を用いて「無職女性」を同定すると自然である。

② 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性（28）を逮捕した。調べによると、この/#その女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男（1)、長女（8）の首を絞め、二男を殺害した疑い。(庵2007:93)

5.2 哲学書籍（語り）

哲学書籍において、基本的にはSはある話題を持ち出し、それの価値、真偽または優劣について叙述、またはコメントする（describing and commenting）するときも、Sは対立型でS-LC内の情報を「この」で指すため、「この」の割合が高くなる。

③ 夢について『荘子』のなかにでてくる有名な「胡蝶の夢」のはなし、このはなしがわたしは好きです。（BCCWJ2009）

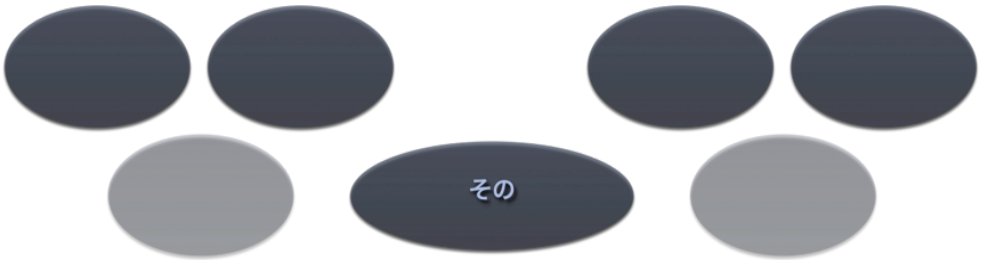
④ 『菊と刀』に語られているこれら日本人の“徳”は、現今ではすっかり忘れ去られている。私は別に、この“徳”が失われたゆえに青少年の心が退廃した、とは言いたくはない。（BCCWJ2009）

同時に、哲学書籍とはいえ、Sは常にHを置き去りにして、いつもS-LCに属すると見なす情報を指示してはならない。ゆえに、SはHと情報を共有する時に融合型DMが発動される。具体的には、次の文学書籍の節で述べる。

5.3 文学書籍（語り）

文学書籍では、Sはある談話の世界（現在や過去、未来、反事実仮想など）を物語

（storytelling）のように展開する。さらに、その世界にHもいると想定し、Hと一体化してS-LCとH-LCを融合させる。一般的には、Sは発話時点のモデルDM1に立ち、(DM1と時間、空間、または時空的に異なる）談話世界DM2に存在する対象を同定する場合、「ソ」がデフォルトである。



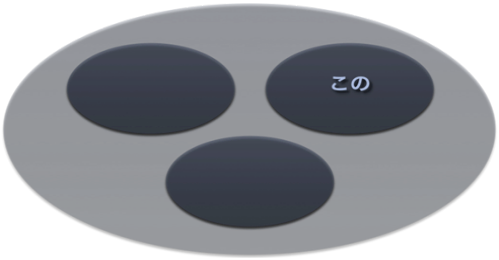
図．６　文脈融合型では、SとHは発話時空DM1に立脚し、
談話世界DM2に存在する対象を「その」で指す

たとえば、例⑤では、「言い換え」があるかどうかにもかかわらず、Sは発話時点DM1から自分の幼い頃の世界DM2に存在する指示対象を同定する。例⑥では、「長距離」であっても、Sは発話時点DM1に立って、物語の世界DM2に存在する指示対象を「その」で同定していると考えられる。

⑤ だがもちろん、その時はモンローの映画を観たことはなかった。その女優はとてもいやらしいセクシー女優なのであって、中学生が見ていいようなものではないと思っていたのだ。（BCCWJ2009）

⑥ 自分が三歳だった頃の新聞を隅から隅まで読むうちに、加恵子はようやくある記事にたどりついた。茨城県のある町で、三歳の女の子の行方が分からなくなったというものだ。そこには行方不明になった子どもの名前と共に、父親の氏名や住所も出ていた。庄司直子。父親は庄司力。「庄司直子っていうのが、私の本当の名前なんだろうかって、不思議だった。ドキドキして、独りでに顔が真っ赤になるのが分かったわ。他の記事も読んでみたけど、その頃、行方不明になった三歳の女の子は、その子どもだけだった」。何カ月間か悩んだ挙げ句、ある日、加恵子はその町を訪ねてみた。（BCCWJ2009）

一方、金水・田窪（1990）の視点遊離の「コ」、吉本（1992）による感情移入の「コ」は小説ではよく現れる。東郷（2000）では、談話モデルの埋め込みを用いて、この現象を説明している。本研究もその説を支持し、談話世界DM2を拡大する：



図．７　文脈融合型では、SとHは談話世界DM2（S・H-LC）に入り込み、
同じDM2の時空にある対象を「この」で指す

この場合、SはHとともにDM2の談話世界に入り込み、DM2に立脚して同じ時空内の対象を同定する。

⑦ うとうととして目が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。この爺さんは慥かに前の前の駅から乗った田舎者である。（金水・田窪 1990）

5.4 対話

対話において、一般的にはSは対立型と融合型両方のモードでHと談話を進行させる。対話の時に、もしSは常に一方的に情報を伝達すると、Hを置き去りにすることになってしまい、談話の円滑性に支障が生じる。そのため、対話ジャンルはSによる一方的な伝達ではなく、SとHによる相互行為であるため、対立型でHの情報と知識状態に依存し、H-LCにある対象を指示したり（図．８）、融合型でS・H-LCの情報を同定したりする（図.６）のは一般的である。

図．８　文脈対立型では、SはH-LCに属する指示対象を同定する場合「その」を用いる

対立型

⑧ R:けど(Fま)その時やっぱり研究の方に興味が移ってたので　L:(Fあー)　R:(Fまー)日本語教師　R:一辺倒と言うよりも研究を続けていきたいなと思っていて　L:(Fふーん)　R:だからそのまま　R:(Fえー)日本の大学院に進んで研究を続けたんですね　L:(Fうーん)　L:(Fふーん)　R:(Fうーん)　L:その大学院では何を　R:大学院では　R:(Fあの)初めは(Fあのー)　R:修士の頃は(Aアイシーユー;ＩＣＵ)です(D(?な))博士の頃は東大だったんですけども。

融合型

⑨ R:(Fいや)(Fいや)そうですか私なんか昔の記憶紐解いてみると京都の男性で好きな人いましたけどね　L:〈笑〉(Fへー)〈笑〉そうなんだ　R:(Fはい)〈笑〉　L:〈笑〉なるほどね(Fい)(Fまー)一人一人違うということで　R:(Fはー)(Fう)そうですね　L:(D(?か))ねR:(Dい)その人はいい人でしたけどね　L:(Fあー)そうですかじゃそう人もいるんだ

もちろん、対話の中では、Sは自らの言語文脈領域S-LCに情報が帰属していると捉え、指し示す例もあるが、あまり多く見られなかった。

⑩ R:もうとにかく練習中帰らない子供がいっぱいいましたね昔は(Fうん)だからこの辺が今の子供達と　L:(Fへー)　R:昔の子供達とのやっぱり　R:違い　L:(Fうーん)　R:でこの違いっていうのは何が違うかっつったらやっぱり　L:(Fうーん)　R:(Fあの)うちでの家庭の　R:中で(Dな)家庭環境の問題が一つある。(CLS対話)

６．結論

本研究は、文脈指示の対立型と融合型という観点から、ジャンル別コーパス調査をもとに、６種類のジャンルにおける「この」と「その」について調査を行った。その結果：

三つの語りジャンルでは、顕在的な聞き手がいないため、話し手が聞き手とその知識状態を考慮するか否かということは、指示詞の選択に大きく影響を与える。三つの対話ジャンルでは、顕在的な聞き手がいるため、その知識状態を考慮する必要がある。このため、話し手は指示対象を聞き手のLC、または二人の間の談話世界に登録されている情報として捉え、「その」で指し示すのが一般的である。これはなぜ新聞において「この」が「その」を上回り、小説では「その」が「この」を上回ることの理由であると考えられる。

最後に、本研究の選択原理を提示する：

I. 文脈対立型における選択原理
「この」はSの言語文脈領域に存在する指示対象を同定するときに用いる。
II. 文脈融合型における選択原理
「この」はSとHは談話世界DM２に入り込み、同じ時空内の指示対象を同定する時に用いる。

本研究の表.2,3の調査結果から分かるのは、語りと自由対話ジャンルでは「この」と「その」はすべて「は」と結びつきやすい。これは庵（2007:122）の「この」は「は」、「その」は「が」と結びつきやすいという説に反しているため、この問題を将来の課題にする。

---

[i] 本研究はKHCODERを用いて、日本語話し言葉コーパスの三種類の対話文（学会インタービュー、模擬講演インタービュー、自由対話）において、「この／その＋NP＋は／が」というパタンで「この」と「その」を抽出した。また、語りについて、FNNニュース2010年1月分をインターネットで観察し、日本語書き言葉コーパスの書籍の哲学ジャンル（2005年）と文学ジャンル（2005年）の地の文から「この」と「その」を採集した。さらに、すべての例文を目で確認し、現場指示、絶対指示、代行指示を除き、指定指示のみを残した。

主要参考文献

庵　功雄 2007 『日本語におけるテキストの結束性の研究』 くろしお出版

庵　功雄 2008 「現代日本語における限定詞の機能-「この」と「その」の使い分けの原理-」 『日本語文法学会第９回大会発表予稿集』

金水　敏・田窪行則 1990 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」 金水・田窪（編）『指示詞』 ひつじ書房 1992

金水　敏・田窪行則 1992 「日本語指示詞研究史から/へ」 金水・田窪（編）『指示詞』 ひつじ書房 1992

東郷雄二 1999 「談話モデルと指示-談話における指示対象の確立と同定をめぐって」 『京都大学総合人間学部紀要』 第6巻

東郷雄二 2000 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」 『京都大学総合人間学部紀要』 第7巻

劉　　驫 2010「談話モデル理論による文脈指示「この」の選択原理-情報送信者の伝達方略の観点から」第35回関西言語学会研究発表